

91 改めて、「教育は一つなり！」を、しくみ（システム）として創り出すためには?!

堂本 彰夫

(1) 「生涯教育（学習）論」が、それを後押ししてくれる?!改めて、それは、どういうことか?

しかるに、これは、前号（90）からの続きであるが、私の「教育は一つなり！」という表現（主張）は、まだまだ現時点では、かなり乱暴な言い振りであるとも言えるのであるが、近年の『地域学校協働活動』の活発化（CSや地域学校協働本部事業等）や『総合教育政策化』の動き、そして、それらと軌を一にする？、私の「教育協働」の理念は、他でもない、一方の「生涯教育（学習）論」を突き詰めていくと、どうしても、そのようになる！逆に、そうならなければ、「生涯教育（学習）論」は、雲間に浮かぶアドバルーン（遙かなる理想？）として、大空（虚空？）を漂うだけとなるということである（折角の「教育基本法第3条」の理念も、そういう状態であるということ?）?!現に、まだまだ地域・学校レベルでは、その意義・成果は顕現していない?!否、むしろ表面的には減退している（すなわち、教育行政、中でも懸念されるのが、「社会教育行政」の雲散霧消、二極化の兆候である！そのためか、「生涯教育（学習）論」に対する、社会全体の熱量も下がってきている?）?!

すなわち、教育（学習）を、一人ひとりの生涯に亘るものとして捉え（「いつでも、どこでも、誰でもが学べる」、その後、「その成果が適切に評価される社会」ということが付け加わったが!）、それを実現するために、社会にあるすべての教育（学習）資源・機会の「統合 integration」が求められるということであるが（「タテの統合」「ヨコの統合」の両軸によって!）、実際に、誰（どこ）が、どのような責任（権限）で、どのように、それらを進めていくのかが見えていないということである！当然であるが、思うだけであったり、提唱するだけであったりは、「誰（どこ）にでも出来る」わけである！しかし、様々な問題点・課題がある中で（法的不備や組織制度上の脆弱さ等も含めて）、それらを超克し、望ましいしくみ（システム）を創り出していくことは、途轍もなく困難であるし、そもそも長い年月を必要とするとするわけである（ここでは、かの「生涯学習のまちづくり」事業が思い出される?）!

尤も、現時点においても、「生涯教育（学習）論」は、それはそれで意味があったし、それに基づく施策や事業、そして個別のシステムも、個々においては成果を上げてきたし、人によっては、喜ばれるものも多々提供してきた（県民・市民大学、学校／大学開放や社会人入学等）?!だが、やはり、その理念は、私達が、これまで別々だと思ってきた（別々に対処されてきた）、「家庭教育」「学校教育」「社会教育」の連携・協力（→事実上は、後二者の一体的推進であるが!）がなされなければ、ほとんど満足に（今様に言えば、「持続可能な」形では）、成就できないということも明らかとなっている（最近年の「総合教育政策化」の動きは、そのことを如実に示している!）?!

ちなみに、そうしたことを克服するために、主として、一方の社会教育関係者は、「学社連携」から「学社融合」へというようにもしてきたが、その言葉の曖昧さ（危険?）も手伝って、他方の学校教育関係者には、ほとんど浸透していない?すなわち、その連携・協力の中で、双方が、共有の目的・内容で取り組めるものを「融合領域」と呼び、そこでの協力関係を「学社融合」とし、一歩進んだ形にしようとしたが、それは、分かり易かったが、ある部分だけの協力関係ということになり、結果的には、むしろその反動?として、それ以外は、それまでのしくみ・取り組みでよいというようなスタンス（一種の安堵感?）を生み出したのでもある（尽力されている人には、大変申し訳ないが!）?私からみれば、そこでは、「事業や活動を一緒にやること」と「お互いの関係や成果をつなげる」ことが乖離しているのである?!それでは、目指す「統合 integration」とはならない?!

(2) 問題は、それを、実際に、どのようなしくみ（システム）として創り上げればいいのかなのである!

ということで、学校も含めて、各種関連機関・団体等においては、連携・協力、ネットワークづくり、はたまた「生涯学習のまちづくり」等、それらが、声高に提唱されても（最近では、緩やかな協力関係を示す「プラットフォーム」というような言い方がなされているが!）、実際には、各教育の分野は別々に動き、たとえ三者（事実上は「学校教育」と「社会教育」の二者!）が密接な関係があるということは分かっている、法制度として、そして、それらに、仕事として関わる者にとっては、直接には関係のない、換言すれば、それぞれ自己完結的、分離独立的な存在になっているということである?!それが、言わば、現在の「生涯教育（学習）論」の状況なのである?!

もちろん、それらは、人類社会の進歩（単純には、そう呼べないところもあるが?）の一環として、「学校教育」、「社会教育」、「家庭教育」だとかに分けて捉え、そのための法律やしくみ等が、良く言えば「多様性（裏を返せば「個別性」?）」を保持して、悪く言えば「バラバラ（無秩序?）」に存在しているということであるが、それは、言わば、近代社会の「分業（体制）」の所産でもあるわけである?!しかし、実は、その「分業（体制）」に、大きな「瑕疵」、否、「落とし穴」もあったわけである?!要するに、全体が見えていない!見ようとならない?!

だから、実は、ここが一番の問題となっているのであるが、一方で、重要な柱であった社会教育（行政）が、財政上の逼迫と相俟って（弱いところが狙われる?）、雲散霧消したり、様々な形（部署）に分化していつているのである（ある時期、「生涯教育（学習）」の意気揚々たる旗手であったにも拘らず!）!それはそれで、ある種の時代の流れであり、その実質的な機能や役割が、別な形で、別なところで生かされるのであれば、甘受されるのかも

しれない(事実、そのように受け止めている人もいる?)?!しかし、それは、一方で、教育(行政)の脆弱化(縮小化)をもたらすものとなり、新たな「総合教育政策化」の担い手の手薄・不在化ともなるわけである(中には、元々がそうであり、実質的には変わりが無いというような、自嘲的で、妙な納得もあるようであるが?)!

このように、やはり今懸念されるのは、「社会教育(行政)」の衰退なのであり、事実上の消滅(教育委員会内での)なのである(ただ、それが、言わば、状況の変化に対応出来なかった?自らが招いた失策であれば、そのこと自体は反省されなければならないし、そのための再チャレンジは、是非とも必要なことである!実際、「社会教育」という呼称や、そのための部署を、再び立ち上げているところもある!)!とにかく、学校教育(行政)と社会教育(行政)の動きが、結果的に「タイムラグ的なもの」になったことが、私からすれば、かえすがえすも残念でならないのである!

いずれにしても、そこに、「教育(行政)」の全体や、それを構成する個々の教育(行政)の相互関係(役割分担)が見えなくなっていたり、どこかの教育(行政)だけが肥大化・困窮化していたり、どこかの教育(行政)の役割が消滅させられたりしていれば、それこそ、「教育(行政)」の全体(総和あるいはバランス?)が崩れ、その総合力(合力)が発揮出来なくなる?!だから、私は、その理論枠組みとして、「教育の三層構造的把握(→「教育(形態)の三層構造図」)や「ひとづくりとまちづくりの循環づくり」(→「教育(ひとづくり)と地域づくり(まちづくり)の循環構造図」→愛称「曼荼羅図」)というようなものを提示したのでもある!

(3) ただし、それは、ある意味本来の姿?!その見立てがなければ、「生涯教育(学習)論」も意味がない?!

そこで、改めて、そのような現実(隘路?)を踏まえて、いかに実現可能なしくみ、取り組みとなすかであるが、そこでは、「地域」が必要としている「ヒト、モノ、コト」を、もう一度洗い直し、関係者の総意によって、可能な限り納得のいく形にしていくことである?!そのために役立てて欲しいのが、私の「教育(ひとづくり)と地域づくり(まちづくり)の循環理論」なのであるが、実は、それは、ある意味?本来の姿に戻したもののなのでもある?!そこに、「教育は一つなり!」が見えてくるのであり、また、そうした見立てがなければ、「生涯教育(学習)論」は、個々の地域(自治体)にあっては意味がなくなるのである(「地域学校協働活動」は、まさに、それとリンクしているのである?!ただし、本当は、「協働のまちづくり」等もそうなのではあるが?)!

とは言え、それは、人為的(政策的?)に創り出す(直す?)ものではあるので、その時々における、目標・課題の達成評価(の観点)が問われる!そうでなければ、単なる一部の人の自己満足(狂騒?)、あるいは表面的な付き合い状態となる?!そこで、その評価の観点(仕方)であるが、例えば、かの「社会に開かれた教育課程」、「プログラムマネジメント」のその後(実績?)はどうなっているのか?また、そこでの、「主体的・対話的で、深い学び(アクティブラーニング)」のその後(実績?)はどうなっているのか?

端的に、それらが、CSや地域学校協働本部事業とどう関わっているのかであるが、その成果の具体的、実際の指標づくりがなされなければ、管理職の人達はともかく、一般の教員達、そして、その背後にいる保護者達の意識や行動の変化には至らない?すなわち、そこに必要なのは、とりわけ子ども達の変化であり、学校での学習(生活)の変化である!意欲とか、動機付けのことであるが(「学力」は、まさにそこに直結している!)、そしてまた、一方で、いじめや不登校状況の変化であるが、そうしたことを、まさに「持続可能な」形で追っているかなのである!そして、そうした新しい形・動きの中で、親も含めた、地域の人達、そして、何よりも大切なことは、その地域の社会教育分野の人達との連携・協力がどのようにあるのかということなのである!

特に後者は、従来の授業(カリキュラム)以外での連携・協力ではなく、他ならぬ、その授業(カリキュラム)内での連携・協力が問われるのである!例えば、午前中の授業(カリキュラム)は、従来の、自校・自教室で集中的/集約的に、午後は、学校外へ出かけたり、学校外との交流を適宜行ったりする(動画やズーム学習を採り入れた!)とかである(かの「合校(経済同友会提唱)」?)!そこでは、特に「総合的な学習の時間」や種々の「特別活動」のやり方等が、改めてクローズアップされてくるが、それが、新たな「カリキュラムマネジメント」の目玉なのではないだろうか?そして、それらを実現するのが、CSや地域学校協働本部事業なのであり、だから、両者の一体的実施が望ましいとされるのである?!

実は、そのために、私は、学校教育関係者に向かって、「教育協働と総合的な学習の時間等の関係(図)」とか、「教育協働ネットワーク(中学校区)モデル図」とかも作成しているのであるが(「教育協働への道」5と6)、そのところを、一方の社会教育関係者が全体で(協力して)見据えていなければ、相変わらずの個別の連携・協力となったり、さらなる負担を強いられる(本音を言えば?厄介な)ものになったりもする?!結局は、制度(システム)の問題ということになるが、個々の存在意義や役割分担は、あくまでも教育(学習)の全体(総和)から見据えていかなければいけないということである!

もちろん、それだけであれば、これまでも、多くの関係者達は、そうした視点や取り組みを有してきたし、その限りにおける立論や実践を種々行ってきた!そして、これからも、そのこと自体は、その成果(の実感?)と相俟って、さらに拍車がかかっていくことであろう(実際、そのように動いている!)?!また、新たな取り組みも、一方ではお進んでいる!ユネスコの「(持続可能な)学習都市」(「フォーマル教育」と「ノンフォーマル教育」の融合的推進?)の取り組み等であるが、これらが、これからどのように推移していくのかである?!